

派遣元と派遣先を結ぶ唯一の情報誌

月刊

人材ビジネス

ご購入はネットで <http://www.jinzai-business.net/>

2011

08

vol. 301

第1回シンポジウム

派遣事業における

コンプライアンス経営のあり方

NPO法人 人材ビジネスコンプライアンス推進協議会主催

J I N Z A I B U S I N E S S

派遣法の行方 第7回 派遣法施行から25年

需給双方にニーズがあり

法で禁止しても抑え切れない



対談 戸荻利和氏 法政大学大学院客員教授×本誌主筆 三浦和夫



“健全な発展”を愚直に目指す

日本生産技能労務協会会長 清水竜一氏 インタビュー

第1回「製造請負優良適正事業者」認定

『クレド』の社内実践が、優良適正事業者認定に貢献

五十嵐庸公氏・ジャパנקリエイト社代表に聞く

トピックス

第5回中国対外労務協力国際交流会

国際交流会で垣間見た中国の熱い期待



OPINION

人材サービス会社ガイド(巻末)

「支援者」としての人材ビジネス

社会貢献のキーワードから探る派遣・紹介の「もう一つの役割」

レポート 伊藤秀範

第四回

「外国人に日本での活躍の場を！」

ビーコスの外国人派遣&紹介 前編

今回と次回の2回に分けて、外国人の人材派遣、人材紹介などを行っているビーコスの外国人雇用にスポットをあてる。前編では、まだホワイトカラーの外国人雇用が一般的ではなかった創業時の、「外国人活躍の場」創出の原点に迫った。

◇◇◇◇◇「留学後は帰国」への疑問◇◇◇◇◇

グーグルで「外国人の派遣」を検索すると、約1530万件もの関連ウェブがヒット。その一番上位に現れるのが、外国人の人材派遣、人材紹介などを行う人材会社ビーコスの関連サイトである。

しかし、同社が誕生する1998年以前の日本では、「外国人の雇用」といえば一部の工場で働くブルーカラーが一般的。「ウェブ上で外国人ができる仕事を検索しても、まったくヒットしなかった。検索でヒットするだけの仕事があることもなかったのです」。ビーコス代表取締役の金春九氏は、創業当時をそう振り返る。「当時、われわれのような留学生は、日本での勉強を終えたら、帰国するものという風潮がありました。実際、同じ韓国人の留学生のほとんどは帰国していました。が、中には私のように日本が好きで、日本で好きな仕事を続けたいという人も多くいたわけです」。



ビーコス代表取締役の金春九氏

◇◇◇◇◇人材会社としての創業の原点◇◇◇◇◇

日本で就職活動をしても、「自分のやりたい仕事が見つからない」。金氏が周りの留学生の友人にそう打ち明けると、彼らも同じような感想を漏らしたという。

「大学3年、4年の時期になると、日本にまだまだ興味があり、日本に残って仕事をしたいと考える留学生同士が、『どうやって日本で仕事を見つけたらいいのか』『チャンスがない』などと愚痴をこぼしている。その光景を見ながら、これだけ日本に対しての愛着や関心が高く、日本語も話せるのに、彼らを活用でき

ないのは、なんてもったいないのだろう、と思いましたね」。

自分と同じように日本での活躍の場を求めている外国人がこれだけいる。日本語が堪能で、専門性も豊か。「そんな彼らの活躍の場を創り出したい」。そんな使命感にも似た志から浮かび上がったキーワードが、「人材ビジネス」。人を活かす「人材会社」としての創業であった。

創業翌年の1999年、金氏は再び、グーグルで『外国人の派遣』を検索した。すると、上位の1〜3位にビーコス関係の人材派遣・人材紹介のリンクが並んだ。

金氏は心の中で呟いた。『外国人がホワイトカラーで働ける足がかりが一本出来た』。

以来、日本で生活する外国人にとつて、ホワイトカラーでの就業機会が飛躍的に増加していくこととなる。

◇◇◇◇◇仕事を通じた交際交流◇◇◇◇◇

創業以来、ビーコスは堅調に



日本人以外に、外国籍の社員も活躍するダイバーシティな職場

右肩上がりの売り上げを維持している。

そのビジネスモデルの詳細と、国内企業から寄せられる人材ニーズの現状等については次回の後編（9月号）に譲るとして、ここでは引き続き、ビーコスの創業の精神でもある「外国人の活躍の場の創出」への取り組みに着目したい。

「これは私の勘違いかもしれませんが――」。そう前置きして金氏は創業当時に抱いた自身のあるこだわりを語り始めた。

「例えば国際交流というと、学

生同志の交流やボランティア活動などが一般的なのかもしれませんが、私はこうした取材の場も国際交流だと思っています。

韓国料理が美味しい、日本の歴史に興味があるという文化交流的なものだけではなく、やはり大学を卒業するぐらいの年齢になれば、誰もがこういう仕事をやりたい、あるいは仕事を通じて国際交流もしていきたいと思うのではないのでしょうか。

1998年当時、金氏の周りの外国人が日本を目指した理由は、「多くはキャリアアップが目だったと思う」と金氏。しかし、「当時の日本には、留学後、外国人としてのキャリアアップが図りにくい風潮があったように、私には映りました」。

◇◇◇◇◇日本の広告塔にもなれる◇◇◇◇◇

「外国人雇用」というよりも、まだ「外国人労働者」というブルーカラーのイメージが色濃かった時代。外国人の雇用は、若者フリーター急増につながるのと

批判の声も一部にはあった。

その「社会的な風潮」に風穴を開けるには、社会が容認するような成功モデルの確立が一番の早道だ。創業以来、そうした成功モデルの量産、ならびに「自らもその事例にならなければならぬ」（金氏）と走り続けた13年。その先駆者としての手応えを、人材会社としての「活躍の場の創出」、そして「仕事を通じて国際交流」のフィールドにおいて今、金氏は感じ始めている。

「日本で留学し、その後も日本で仕事を続ける。そんな彼らは、いずれ母国に戻ったとき、日本という国の素晴らしさを伝えられるような広告塔にもなりうるわけです。いわば民間レベルで各国大使の役割を担うような存在ですね」。

◇◇◇◇◇後輩留学生の「目標」に◇◇◇◇◇

そうした仕事を通じた国際交流、あるいは外国人雇用の循環は、結果として外国人の活躍の場の創出のみならず、「ひいては

留学生個々の自立にもつながる」と金氏は言う。

「奨学金などの援助を受ける側から、仕事をする事で彼らが日本に恩返しができる。自立もできる。それも仕事を通じた国際交流であり、仕事を通じた社会貢献の好循環の仕組みでもあると考えています。人材会社の立場から、今後もそれをサポートしていきたいですね」。

金氏は以前、何度か母校でもある立命館大学で「ベンチャーを興した元留学生の先輩」として講演を行った経験がある。

講演後の懇親会で、「同じ留学生として日本に学んだ金氏の姿を見て」私にもやればできるのだと確信しました」と笑顔で語った後輩留学生の姿が、金氏は今でも忘れられないと言う。

「目標とされる事例になる。それは留学生当時の私自身が渴望していたものです。ビーコスがそうした事例の一つになれることがとても嬉しい。彼らの目標となるためにもわれわれは存在し続けたい。そして、それが義務でもあると感じています」。